



日欧留学生  
交流に関する  
シンポジウム

主催：学習院女子大学  
後援：学校法人学習院  
助成：国際交流基金

# 日欧留学生交流に関するシンポジウム

主催: 学習院女子大学

後援: 学校法人学習院      助成: 国際交流基金

# プログラム

平成12年10月14日(土)

## 公開講演

「サヨナラだけが人生だ——語順の話」

早川東三 (学習院女子大学長)

「私と日本語・日本文化」

ローレル R. ロッド (コロラド大学・全米日本語教師連盟会長)

平成12年10月15日(日)

## シンポジウムⅠ「ヨーロッパにおける日本語教育」

司会：脇田 宏 (学習院女子大学)

「イギリスで日本学を学ぶ」

マーク・ウィリアムズ (リーズ大学)

「ワルシャワ大学の日本語教育」

岡崎恒夫 (ワルシャワ大学)

「ブカレスト大学における日本語教育」

ユリア・ワニエク (ブカレスト大学)

「チェコ・パラツキー大学における日本語教育」

パベル・フランデルカ (パラツキー大学)

「エストニア人文大学における日本語教育」

マレット・ニュッケ (エストニア人文大学)

## シンポジウムⅡ「日本語教育の現状と課題」

司会：西尾珪子 (国際日本語普及協会)

「日本語の教育の現状と課題」

アレキサンダー・フィリポフ (サンクトペテルブルグ大学)

「日本の大学における日本語教育——国際基督教大学の例から」

村野良子 (学習院大学)

「海外の日本語教育と日欧交流」

松井嘉和 (大阪国際大学)

## シンポジウムⅢ「日本研究をめぐる」

司会：植木 浩 (学習院女子大学)

「異文化間の対話の可能性をめぐる」

レイン・ラウド (エストニア人文大学)

「自画像のディレンマ——日本芸術研究の新傾向とその問題」

尼ヶ崎 彬 (学習院女子大学)

## シンポジウムⅡ「日本語教育の現状と課題」

西尾 珪子

国際日本語普及協会

それでは、午後の部のシンポジウムをはじめます。「日本語教育の現状と課題」という題でございます。実はこのプログラムの通りに並んでいただいているのですけれども、先程打ち合わせをいたしまして、スピーカーのご発表の順を変えさせていただいております。ご了解いただきたいと思います。1番はじめにフィリポフ先生、そして次に村野良子先生、それから松井嘉和先生と、こういう順にご発表いただきます。まずお三方に20分ずつ発表していただきまして、お三方が全部終わりましたから、フロアの方々と、また、先生方同士でも、質疑応答を進めていきたいと、このように考えておりますのでよろしく願いいたします。

## 日本語の教育の現状と課題

アレキサンダー・フィリポフ

サンクトペテルブルク大学

主に、ロシアの中の、日本の関係の諸問題について話したいと思います。でも、短くしようとは思いますが、どうしてロシアで日本の研究が始まったのかというような話もちよつとしたいと思います。最初の日本についての情報がロシアに来た時代を決めることは出来ないかも知れませんが、ピョートル大帝の前の時代にも、少しぐらい、日本という国があるという情報は、ロシアに来ています。一番初めの情報はマルコ・ポーロの旅行記でしたと思います。最初は、マルコ・ポーロの言葉だけで、ロシアには「日本」が知られたのです。でも、マルコ・ポーロの情報は、全てのヨーロッパ人に、日本がとても素晴らしい、立派な、金持ちがいっぱいいる国というイメージを与えたのです。マルコ・ポーロの旅行記には「日本には、壁も、屋根も黄金から作られた」という話がありました。それで、そんなイメージが長い間いろいろなヨーロッパの国々に残ったのかも知れない。最初に、東洋学と日本学（日本研究学）が始まったのは、だいたい、ピョートル大帝（もう一つピョートル一世という名前の言い方がございますけれども）のころです。彼はいろいろな国に興味があつて、主に、貿易を成功させる為に、自分の国も成功にようにしてがんばりました。それで、東洋の国々、ロシアの南の方、ロシアの東の方にある国々にも、かれの時代から政府はかなり興味を持っていました。そこで他の国の様々な情報が、本とか、色々な手紙・日記の形でロシアへ来ました。ピョートル大帝の時からロシアには少しずつ、日本語だけではなくて、アラビア語、中国語、別の国の通訳者・翻訳者も現れています。ピョートル大帝の時時代には、もう一つの大事な点があります。あの時代には、ピョートル大帝によって、中国との色々な関係がよくなりました。貿易もできるようになり、色々な大使の訪問のさいにもお土産の交換とかがあり、時々日本の芸術品もロシアに入るチャンスがありました。これに

よって、全ヨーロッパの中で殆ど一番古い芸術品のコレクションがペテルブルグに集められています。今でも、もし、来られるチャンスがあれば、少しぐらい、エルミタージュ美術館とか、その他、様々な離宮、立派な宮殿においでになれば、江戸時代の芸術品も時々展示されています。あの時代は、ヨーロッパにもロシアにも、日本について直接入った情報があまりなかったころです。例えば、ロシア人は、色々なヨーロッパの書物からとか、色々な話によって、日本についての情報を貰いました。そのため、日本人のイメージも、あまり正しいものではなかったと思います。

ご存知のように、江戸時代初め頃、鎖国政策の時に、日本でカトリック教と色々な悪い関係になりました。ロシア人は、ヨーロッパ人から「日本には、カトリック教徒が凄くたくさん罰されていた」という話を聞きました。これで「日本人が怒りやすい、いい人かどうか」、気をつけるような感じの話にもなりました。でも、そんな話は日本に関してだけではなくて、別の国ともあったことです。例えば、昔のロシアにとって、中国も、日本も、結構遠い国の感じがしたので、貿易・関係が出来るように、行跡について考える必要がありました。その前は、ロシア人は中国へも来て、北京にロシア正教の大使みたいな人もいたことです。このような人が、中国へ行ったとき、ロシア政府から次のようなことが頼まれました。成る可く、優しく、わがロシア正教が広がるよう努力してください。厳しい方法はいけない。優しくして、酷い事に絶対ならないように。この命令を守りながら、日本でもロシアの神父さんが仕事を始めたところです。中国は、日本の情報をもたらすために長い間に大事な役割を果たしました。様々の時代には、ロシアの大使が中国へ行って、中国の記録を研究し、ロシア語に翻訳しましたが、その書物の中には、古代日本（大和）に関する情報もあったという事です。従って、昔の日本史への興味がロシアで現れた。

その後、日本と中国の研究は、長い間同時に、同所で行われることになった。殆ど、20世紀はじめ迄、大学で、中国語の勉強は日本語の勉強と一緒に行われた。

それから、直接ではない関係から、だんだん、ロシアは直接に日本、そして日本人との関係を結ぶようになりました。ピョートル大帝の時代（16世紀終わり頃～17世紀はじめ頃）には、日本との貿易を目的に、ピョートル大帝は、日本を探す為に何回も、

人を送りました。でも、日本はずっとどこか東の方にあるということが解っているだけで、見付けるまでに、何十年もかかりました。けれども、ピョートル大帝の時には又、鎖国政策にもかかわらず、ときどき日本人が日本列島の周りで魚釣りに行って、凄い台風か嵐かによって遭難して、船を失って、ロシアの海岸についたことがありました。初めて、ピョートル大帝の命令によって、ロシアの方に、もし誰か面白い外国人がいる場合、是非その人を都まで、王様との面接に届けるように要求しました。それによって、18世紀はじめにも、半ば頃にも、エカテリーナ2世の時にも、色々な日本人はその道でロシアの首都（ペテルブルグ）へ来ました。その人の名前は、ちょっと、変化された形になったかも知れない。でも、何人かの名前は有名になりました。彼らの中は、サニマ、デンベイ、ソザ、ゴンザという日本人がいました。勿論、彼らの中では大黒屋光太夫（エカテリーナ2世の時代、18世紀後半）が一番有名になりました。この日本人はロシア皇帝のほかにも、学者ともあったことがありました。シベリアの東の方からサント・ペテルブルグまでの道は、場合によって何ヶ月もかかりました。最初、どういう外国人か、日本人であるということもわからなくて、ペテルブルグまで送られました。それで、ペテルブルグに着くまでに、その日本人達がロシア語に少し慣れて（数ヶ月の旅行によっても）、色々な人とも話すことが出来るようになりました。勿論、簡単な会話・説明しか出来ませんでした。この日本人達との会話の内容の記録は、後に最初の日本に関する書物になりました。日本人がロシアの都まで来たことから、ピョートル大帝も出来る限り日本との関係を作ろうと思ったので、あの時、18世紀はじめに、ペテルブルグには日本語の学校も創立されたのです。その学校は、世界中で、日本以外で最初の日本語学校です。ポルトガル人によって日本の方で創立された学校はもっと前のものですが、あれは日本国内のことになります。このペテルブルグの日本語学校は数十年後、シベリアのイルクーツク市に移動されました。日本の方にもっと近くなると、何か貿易になるかもしれないという理由でイルクーツク市の学校で日本語の研究が続きましたが、結局その研究にはあまり意味がないという話になったそうです。日本との貿易が鎖国政策のため絶対出来ませんでした。それで、政府の財政にも限りがあり、学校への支出をやめて（財政の不足で）、学校を閉めました。それで、ロ

シアで日本語教育の伝統はあの昔の学校から始まったものです。

18世紀にも、ロシアに日本に関して詳しい情報もありました。でも、本当の学術的意味で日本研究ではなかったかも知れない。実際、日本研究・日本学が登場したのは、19世紀半ば頃と思います。鎖国政策も終わって、ヨーロッパ人も日本へいっぱい来て、ロシア人も（大使、領事など）来て、日本研究が進んだのです。日本のことを勉強してから、ロシアへ帰って、最初の本を書いたことによって、ロシアでの日本学の創立者になったと思います。当時、ロシアで日本語の研究の場所は大学でした。日本語の勉強とともに中国語・韓国語も勉強しました。講座として、システムのような感じの日本語教育が始まったのは、19世紀の終わり頃です。1998年、サンクト・ペテルブルグ大学の日本語科は、100年周年記念を迎えました。19世紀70年代の卒業生である V.Y.コースティレフが長崎総領事館で長く働いて、ロシアへ帰ってから、20世紀はじめにペテルブルグ大学の日本史講座の創立者になりました。彼によって、最初の日本史に関する本（1888年）も発表されました。著者は、この本の前書きに「たいした本ではない」と書いたけれど、今までそのような、資料に基づいた書物が発行されたことがなかったのです。その著書に書かれた神話・人物・政治のこと等は今でも独特な、貴重な情報として残っています。後は、全体の日本史だと、3回だけ新しい教科書がでたことがありました（1939年、1988年、1999年）。勿論、アジア史の教科書の一部としては日本史がよく発行された事がありました。

その前のテーマ（19世紀後半）に戻しましょう。当時、一番盛んである日本研究の国は、ドイツ・イギリス・フランス・ロシアでした。当時の4カ国語の雑誌が今でも学問的意義が高いです。米国の方で日本研究が盛んになったのは、もっと遅い時代でしょうか。米国で日本研究の一人の創立者になった方が、ペテルブルグ大学の卒業生である S.イエリセーエフです。日本で留学して、革命後のロシアから亡命してソルボンナ大学で教えて、30年代には招待で米国へ来て、E.ライシャワーとともに日本研究の創立者になりました。戦後、米国での日本研究は物凄く高いレベルになりました。

その時代、ロシアには日本研究のタイプは、変りました。国が違いう時代に入って、学者も亡命者になって、残っていた学者も新



しいの政府とあわなかった事もよくありました。それで、ソ連時代の日本研究は、違うイメージになりました。主にイデオロギーの関係が凄く大事なものになり、イデオロギーと少しでもあわない人とか、又は、場合によって噂だけでも、罰されたり、閉じ込められた事もありました。天才的な、優れた研究者が困ったこともよくありました。ボズドネーエフ、ネーフスキー等が、変な噂によって、罰されていたのです。教育のレベル・能力が高い学者の層が薄くなりました。どんな研究の分野でも（日本史の場合にも）、イデオロギーの基礎と合わせる事が必要になりました。その前、あまり日本史の研究が少なく、20世紀前半行にはイデオロギーの圧力が強すぎるような感じがします。ソ連時代に、日本研究で重んじられていたのは、現代史とか、政治状態とか、日本での社会主義の発展とかです。別のテーマだと、あまり、政府の方から、支援がなされないの、そんなに発展しないような事になりました。

戦後のことだと、研究の仕方も、又、変わりました。中国が社会主義時代に入ってから、中国研究が強くなり、日本研究者の人数が少なくなりました。勿論、研究書物の数にその影響が表れやすい。最近まで、この様な状態が残っていました。今では別の時代に入って、改めて増えるようになりました。日本研究者と中国研究者の違いについて話せば、辞典・百科事典等の書物は、種類、部数、タイプが今でも異なります。コンラド監修の和露辞典でも、最近まで再出版がロシアにはなかったほどでした。同時期に日本では何回も、殆ど毎年、上記の辞典が再版（ナウカ出版）になりました。露和辞典に関しても、同じ状態です。ペレストロイカに入るまで日本研究センターも、主にモスクワ・レニングラード・極東——この3カ所しか殆ど行われてありませんでした。ペレストロイカに入ってから、この様な日本研究センターの数が結構増えたことでしょう。ソ連時代なら、国立大学しかなかったが、今では、80年代末から、私立大学の数も多くなり、新しい教育センターも現れたところ。今は転換期で、難しい時代です。けれども、これらのことは、日本語研究の為に、日本語の勉強が出来る為にとっても大事なことであると思います。

一つの難しいところは、私立大学の場合、今の時代を生きていくということです。80年代末以降、10年間ぐらい活動している大学がありますが、毎年毎年、生活とその状態が変わります。

一番難しいのは、学生達が払えるような金額と、先生達に給料が出せるような金額を合わせることは、どんな私立大学でも困難です。給料を払わないと、スタッフが雇うことが不可能になります。いい給料は出せませんが、十年以上活躍している私立大学もあります。学生にとって一年の学費は、所によりますけど、7万円から15万・20万円ぐらいまでの大学があります。ロシア人の収入には、高いです。7・8年前ぐらい、大学教育は、ある意味で危機がありました。ロシアの経済が厳しい状態に入ったので、大学を卒業してもいい仕事につけないかも知れないと考えて、入試に来る人が少なくなったのだと思います。最近の4・5年、そんな考えが変わってきて、入試の競争がまた厳しくなりました。今日の状態はそれが続いていると思います。

今、日本語の教育は、大学だけではなくて、学校の段階でも出来るようになりました。例えば、最近の五年間、ペテルブルグだけで日本語学校（小・中・高）に、日本語授業も入ったところですよ。そのような感じで、いいレベルの学校は、3～5カ所になるかも知れません。7歳、10歳からとか、日本語も勉強します。学校を卒業して、大学にも日本語教育を是非続けると言うわけはないかも知れないけど、でも、日本についての知識は、全般の教育の意味でも大事でしょう。この様な学校が生きること、もう一つの問題ですが。主に生きることが出来る学校は、時々、ロシアの法律とも、ちょっと、うまく合わないこともあるらしい。もし、今の学校の制度で先生達を雇うと、彼らには一回の授業で、何十円ぐらいしか払えません。場合によって、日本の様々の協会（日本国際交流基金等）の支援も助かります。教科書、ビデオ講座とか、学校に届けると、とても助かります。

最近、10年間ぐらい、教科書の種類も、日本研究書物も増えています。ペレストロイカまでは、あまり出版されていませんでした。漢字のある書物が出版されていることも、日本教育のために、もう一つの大事なことです。国際交流基金の援助によっても、日本の教育は、少しずつ進むようになると思います。

ソ連時代には、日本への留学は、凄く珍しかった。でも、本当の相互理解の為、とても大事なことでしょう。日本文部省が援助した場合しか、殆ど出来ませんでした（全ソ連に一年で5名～8名とか）。今なら、少しずつ、この様なお互いの交流が増えるので、とてもいいことであると思います。

ロシアの大学には、問題が多いです。書物の部数、教室、設備、研究室などです。講師の不足と言うことも、時々問題になります。レベルの高い講師が大学をやめると、数十年間、その前のレベルに戻る事が出来なくなってしまう。厳しい問題です。私立大学だと、少しもっと自由です。ロシアに住んでいる日本人の人数も増えたことで、私立大学で教える日本人も結構います。

図書館のスタッフ不足も、設備状態も問題です。シンポジウム・学会の準備のこともここ十年、同じように厳しい問題になりました。

現在、ロシアでの日本教育は、二種類のタイプが現れたと思います。元々のクラシックのタイプも残っていますが、その他に、新しいタイプも出来た。新しいというのは、主にビジネス向きで、日本文化を教える授業が殆ど無いタイプです。

地方によっては、日本教育センター（学校・大学・講座など）が凄く早いペースで形成されました。例えば、シベリアの方が、モスクワやペテルブルグと比べて、信じられないほどのレベルで進んでるそうです。

*Ein kleines Referat über die Valenzbeschreibungen in einem deutsch-japanischen Wörterbuch,*  
Poznan 1999.

*Der Deutschunterricht in Japan im Kreuzfeuer,* Tokyo 2000.

『コンサイス独和辞典』三省堂 1998.

『ディリーコンサイス独和・和独辞典』三省堂 2000.

#### **Pavel Flanderka (パベル・フランデルカ)**

所属 パラツキー大学日本語学科  
経歴 カレル大学 (Ph.D)  
NHK プラハ、1993 年以来パラツキー大学  
専門 現代日本史 (戦後)  
在日 北大  
著作 『ロボット化の社会・経済的な方面』カレル大学 1986  
連絡先 Palacky University, Olomouc  
paf.jum@telecom.cz

#### **Alexander V. Philippov (アレクサンドル・フィリッポフ)**

現職 サンクトペテルブルグ国立大学東洋学部極東諸国史科助教授  
経歴 レニングラード大卒 (Ph.D)  
専門 日本史、17 世紀の日本社会の政治組織、歴史、法律、民族心理学、行動の社会規範、  
文化人類学  
在日 熊本大、大阪市大  
翻訳 「徳川百ヶ条」他  
連絡先 Oriental Department, Saint Petersburg State University  
St. Petersburg 199034 Russia  
PhilAlex@AP1498.spb.edu

#### **Rein Raud (レイン・ラウド)**

現職 エストニア人文大学東洋学科教授  
専門 日本語教育、日本文学、平安仏教、日蓮、親鸞  
著作 多数  
翻訳 『徒然草』、『伊勢物語』  
連絡先 Estonian Institute of Humanities, Estonia

## 日欧留学生交流に関するシンポジウム

---

平成 13 年 3 月 1 日発行

発行：学習院女子大学

〒162-8650 東京都新宿区戸山 3-20-1

電話 03-3203-1906（代表）

---

本冊子は再生紙を使用しています